

成人期女性の職業発達と就業継続へのサポート

- 働きがい、生きがい、個人志向性・社会志向性尺度の分析より -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
大山 由紀子

女性にとって職業はどんな意味を持つのか。女性が就業継続するためには多くの乗り越えるべき課題が存在する。就業継続において、職業人としての役割と母親役割のいずれに比重をおくべきかの葛藤が存在する。本研究の目的は、青年期女性の発達課題である、結婚・妊娠・出産などと就業継続意思について、働きがい、生きがい、個人志向性・社会志向性との関連から明らかにし、看護師の就業継続サポートのあり方を探ることである。そのため、431名の看護師を対象に質問紙調査を実施し、完全回答の得られた246名を分析対象とした。対象者の平均年齢は32.8歳、有配偶者が112名(45.5%)、配偶者なしは133名(54.1%)であり、子どもありが97名(39.6%)、なしは148名(60.4%)であった。看護師経験年数は平均10.6年であった。

因子分析の結果、看護師の「働きがい」の構造として「意味の実感」「自己の成長感」「評価」「患者の回復」「環境」の5因子が抽出された。看護は対人援助である。援助プロセスにおいて、看護師は看護という行為を通して関係をむすびそこで意味を意識する。また職業の中で各自の役割を果たすことで充実感を抱き、周囲の人から有能感を認められたいと望んでいる。さらに、患者の回復や職場環境についても働きがいを構成するものであった。本研究の結果、こうした「働きがい」は直接就業継続意思とは関係しないことが明らかとなった。また、結婚後の就業継続意思は、「働きがい」とは関連が見られず「生きがい」と関連がみられた。つまり、就業継続意思は、「生きがい」の中のひとつの選択であり、逆に働きがいがあるからといって就業継続意思に直接結びつくわけではない。

また、「働きがい」と経験年数では、看護師経験4～7年目に評価が一旦減少することや、その場合、「働きがい」における看護実践の「意味の実感」因子の得点が有意に低いという傾向が見られた。

看護師の就労継続へのサポートでは、こうした点に着目して経験年数や看護師の「働きがい」の構造に即した支援が求められるであろう。さらに、キャリア発達への支援と将来展望を見出せるような働きかけが必要であることが示唆された。